
手古舞

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手古舞

【Nコード】

N0848BA

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

八幡祭のその日新助は手古舞姿の芸者美代吉に偶然出会った。それが全てのはじまりで。江戸時代の恋愛ものです。歌舞伎の作品からヒントを得た作品です。

第一章

手古舞

今日は八幡祭である。

江戸の町はそこで賑わっていた。人だかりは普段より多くだ。人も店も騒がしくだ。銭にものに声が乱れ飛んでいた。

さながら呉服屋で火事があつた様にだ。何かしらが乱れ飛んでいた。

その中でだ。長い顔に引き締まった眉、強い二重の目をした背の高い痩せた男がだ。飴をしゃぶりながら一緒にいる仲間達に話をしていた。

「いいねえ、この日は」

「おめえ祭り好きだしな」

「余計にいいだろ」

「ああ。祭りは大好きさ」

彼はだ。黒い飴を右手に持ちながら彼等に応えた。黒と白の着流しをいなせに着てだ。飄々とした感じで歩いている。そうして言うのだ。

「特に八幡様の祭りはな」

「あれかい？可愛い娘がいるからかい？」

「だからかい？」

「いや、八幡様が好きだからだよ」

そのせいだとだ。男は話した。

「だからだよ」

「何だよ、八幡様自体がか」

「好きだからか」

「何ていうかな。八幡様の話を聞くとな」

それだけでだというのだ。

「心地よくなつてな」

「それがかよ」

「おめえこの祭りが好きだっていうんだな」

「そういうことなんだな」

「そうだよ。江戸の華はな」

何かというのだ。

「火事に喧嘩にな」

「それに祭りか」

「で、その中で八幡様の祭りはか」

「新助にはか」

「ああ、最高だよ」

こうだ。この男新助は笑って仲間達に伝える。そうしてだ。その手に持っている黒飴を口の中に入れて舐めてだ。言うのだった。

「俺は火消しで火事はいつものことだ」

「で、喧嘩もする」

「それで祭りか」

「華ばっかりだからな」

それでだというのだ。その江戸の華の中でだ。

「いい感じで楽しませてもらってるさ」

「けれど酒は飲まないんだな」

「それは」

「酒は駄目だな」

それについてはだ。どうかというのだ。飴を舐めながら。

「飲むとそれだけで頭が痛くなつてくらあ」

「で、飴かよ」

「菓子か」

「ああ、俺は菓子だ」

つまりだ。下戸で甘党だというのだ。

「こっちだよ」

「まあ女房は泣かせないからいいか」

「喧嘩はするが酒と博打はしない」

「それで何でな」

「まだ女房がいないんだらうな」

「女房か？」

新助からだ。女房のことについては笑ってこう言うのだった。

「まあそつちはな」

「どうだよ。そろそろ身を固めろよ」

「もういい歳だしな」

「早くしろよ」

「いないんだよ」

こうだ。新助は甘い飴を舐めながら苦い顔になった。

それでだ。また仲間達に言うのだった。

「何かよ。いい相手がよ」

「で、やることはか」

「火消しに喧嘩に菓子に祭り」

「そればかりなんだな」

「へっ、そのうちいい相手が出るさ」

自分ではこう言う新助だった。

「それまで適当にやるさ」

「ったくよ。顔もいってのによ」

「勿体無い奴だよ」

「全くだ」

仲間達はそんな新助の話を聞いてだ。

それぞれ首を横に振って苦笑いになる。そうして横一列に並んで賑やかな人通りの中を進んでいく。そこで適当に色々なものを買ひ祭りの囃しを聞いて楽しんでいた。その中でだ。

一行はだ。その前にだ。ある女達を見た。

「おお、来たな」

「手古舞だぜ」

「出て来たぜ」

緋色の派手な刺繍が入った襦袢に広い袖の着物を着てだ。袴をはき背に花笠を背負った化粧の女達が歩いている。その艶やかな女達を見てだ。

第二章

彼等はだ。口々にこう言うのだった、

「いいねえ」

「あれは深川の羽織芸者だな」

「やっぱりあそこは違うね」

「全くだよ」

こうだ。笑みを浮かべながら言うのである。

しかし新助だけはだ。その中でだ。

その長い首を少し捻ってだ。こう言ったのだった。

「確かに服は奇麗なんだがな」

「何だよ。いい娘はいないっていうのかよ」

「ちよつとな」

実際にだ、こう言う彼だった。

「いないな」

「こりや揚巻でも駄目か？」

歌舞伎の代表的な役の一つだ。助六のヒロインでありその人気は江戸随一だ。

その歌舞伎の中とはいえ絶世の美女でもだ。新助は惹かれないのではないかというのだ。

そう考える仲間達だった。しかしだ。

ここでだ。新助は。

その手古舞の芸者達の中でだ。一人を見てだ。思わず呆然となった。その呆然とした有様は。

誰が見てもだ。それは。

「おい、羽織つてたらな」

「それでずり落ちてたぜ」

「もう呆然としてな」

「何だよ、これって」

「あれ誰だ？」

その新助がだ。呆然としてだ。
それでだ。こう言うのだった。

「ほら、あの」

「あのつて」

「あのつていうと何だよ」

「誰だよ、それつて」

「誰かつてよ」

「あの。前から二人目のな」

その芸者を指差したのである。見ればだ。

絹の様な黒髪にだ。切れ長の流麗な目をしている。その右目の付け根に黒子がありやけにあだっばい。唇は紅で大きめだ。

その彼女を見てだ。新助は仲間達に尋ねた。

「あの芸者誰だ？」

「ああ、あの前から二人目のか」

「あの芸者か」

「あれか」

「そうだよ。あれ誰なんだよ」

新助は彼等にさらに尋ねる。

「一体な」

「あれな。美代吉だよ」

一人がだ。新助に話した。

「深川で評判の芸者だよ」

「そうなのか」

「ああ、あれがか」

「あれがその美代吉か」

「話題の」

仲間達は美代吉と聞いてだ。それぞれ言った。

「凄い別嬪だつて聞いたけれどな」

「噂以上だな」

「ああ、小股が切れ上がったっていうかな」

「いい感じだな」

「そうか。美代吉っていうのか」

新助はその名前をだ。はじめて聞いたといった感じだった。
それでだ。仲間達に実際にこう尋ねたのだった。

「それがあの芸者の名前か」

「ああ、それでな」

「それで？」

「どうしたんだ？」

「あの娘は深川のどの店にいるんだ？」

こんなことをだ。彼等に尋ねたのだった。

第三章

「それでな」

「あれっ、まさかおめえ」

「美代吉に惚れたか？」

「ひょっとしてよ」

「いや、あれはないだろ」

まだ美代吉を見てだ。新助は呆然としたままだ。その顔でだ。彼はさらに言うのである。

「あんな別嬪はじめて見たぜ」

「へえ、こりやまた急だな」

「まさに一目惚れってやつか」

「何時になるかって思ったが今かい」

「ようやくおめえもそうした気持ちになったか？」

「惚れたか」

「ああ、惚れたぜ」

実際にそうだとだ。新助も言ってだ。そうしてだった。その手古舞を追ってだ。その美代吉を探した。すぐにだった。彼女を見つけてだ。真剣な顔でこう告げた。

「おい、いいか？」

「あれ、あんたまさか」

「俺を知ってるのか？」

「火消しの新助さんだね」

こうだ。彼に対して言うのだった。

「近くで見たら余計にいい男だね」

「俺がか」

「そうだよ。いい男だよ」

笑顔でだ。美代吉は彼を見上げて言う。

「成田屋かと思ったよ」

「成田屋か」

市川団十郎のことだ。歌舞伎役者は屋号でも呼ばれるのはこの頃からなのだ。

「俺はそこまで格好いいか？」

「そう見えるけれど違うかい？」

「そんな風に思ったことはないな」

これが彼の返答だった。

「別にな」

「自分に自惚れてないっていうんだね」

「火消しの腕は自惚れてるさ」

そうだとだ。新助は美代吉に返した。

「けれどそれ以外はな」

「ないんだね」

「ないな。自惚れるものは」

つまり火消しの腕には自信がある。そういうことだ。

そのことを言ってた。彼は。

あらためてだ。美代吉にこう言ったのだった。

「それでここに来たのはな」

「どうしてなんだい？」

「一緒にならないか？」

本当にだ。単刀直入だった。

「俺とな。一緒にな」

「それをあたしに言うんだね」

「ああ、言ったださ」

言う、ではない。言っただ、だった。

それを言っただ。彼は。

「俺と一緒に。所持持たないか」

「言うねえ。一直線だね」

「まだるっこしいことは嫌いなんだよ」

江戸っ子として、そして火消しとしてだ。そういうことは好きで

はないのだ。

それでだ。彼は美代吉に言ったのである。

「そういうことだよ」

「そうなんだね」

「で、返事は？」

周囲のことは全く気にすることなくだ。新助は美代吉に問うた。

「返事はどうなんだ？」

「ここでいって言うのが筋だけれどね」

笑ってだ。美代吉は新助に返した。

しかしだ。彼女はだ。

ここだ。こう彼に告げた。

第四章

「その前にね」

「いって言う前にか」

「そう、その前にね」

「どうするかというのだ。」

「見せて欲しいものがあるんだよ」

「俺にか」

「あんたの最高の姿をね」

「それをだというのだ。」

「それを見せて欲しいんだよ」

「俺の最高の姿かよ」

「あれだよ。あんたあたしのこの格好見て来たんだろ」

「美代吉は自分のその手古舞姿のことを問うた。」

「そうだよ」

「ああ、そうだよ」

「ここでもだ。新助は率直だった。」

「ありのままだ。美代吉に話したのである。」

「俺は芸者遊びとかには興味がないからな」

「それでだよ」

「そうだよ」

「そのあんたにだよ」

「美代吉は再びだ。新助に話した。」

「見せて欲しいんだよ」

「俺の晴れ姿をか」

「晴れ姿に全部出るんだよ」

「美代吉はこうもだ。新助に話した。」

「その人ってのはね」

「成程ねえ。だからか」

「じゃあいいね」

「俺の晴れ姿が見たいのならな」

どうかとだ。新助は答えた。

「それはあまり嬉しいことじゃないぜ」

「あんた火消しだよな」

「そうだよ。火消しが見せるのは火事の場合だろ」

言うのはこのことだった。彼は火消しだ。火事の時にこそ動くのだ。

だが火事とは何か。言うまでもなかった。

「家は燃えるし金だってなくなつてな」

「人も死ぬね」

「そんな嫌なものだぜ、火事は」

話すのはこのことだった。

「それで見せるつてのはな」

「そうだね。わかつてるね」

「言語道断だ。そんなの見ろつて絶対に言わないからな」

新助の言葉は強かった。

「人が困つてゐる時に見るとか言うのは下種だぜ」

「じゃあ何時見せてくれるんだい？」

「明日だ」

いきなりだ。明日にだというのだ。

「明日ここに来ればわかるさ」

「明日つていえば」

「火消しが芸を見せるからな」

そうしたこともしているのだ。火消しは粋とだ。江戸では見られている。

その粋な火消しとしてだ。彼は見せるというのだ。

「そうするからな」

「じゃあそれを見せてもらつよ」

「芸ならどんどん見せられるからな」

だからだ。それはいいというのだ。

「人の生き死にとか関わってないしな。むしろな」

「見せて楽しませるものだね」

「だからいいんだよ。それじゃあな」

「そうだね。明日だね」

「来な。そして見てから決めな」

新助はまた強い声で美代吉に告げる。

「俺がおめえに相應しい男がどうか」

「そうだね。そうさせてもらうよ」

美代吉は微笑みだ。新助のその言葉に頷いた。

そしてだ。それと共にだ。ふとだ。こんなことも呟いたのだった。

第五章

「もっとももう見せてもらったけれど」

「んっ、何だ？」

「あつ、何でもないよ」

美代吉は小声だったのを幸いに思った、そしてだ。
そのうえでだ。こう言っただった。

「じゃあ明日ね」

「そうだな。明日な」

「見せてもらうよ」

こう言つてであつた。美代吉は一旦新助と別れたのだった。そして新助もだ。

仲間達のところに戻つてだ。意気込んで言い切つた。

「明日の火消しの見世物な」

「ああ、それな」

「おめえ出るんだつたな」

「出るさ。そこでな」

まさにだ。そこでだというのだ。

「あいつに見せるぜ。俺の晴れ場な」

「あの手古舞に見合うだけの格好をかい」

「見せるつていうんだな」

「火消しの粋を見せてやるさ」

今度はこんなことを言う彼だった。

「だからな。やってやるぜ」

「急だな、また」

「それでもいいか」

「それでおめえがかみさん貰えるんならな」

「やってみればいいさ」

「ああ、やってやるさ」

実際にこう返してだ。新助はあらためて黒飴を口の中に入れた。そしてその飴をしゃぶりながらだ。意をあらたにするのだった。次の日だ。彼はだ。

火消しの青と白の法被を着てだ。祭りの余興の場に現れた。頭には白い捻り鉢巻を締めている。その絞め方がまさに江戸のものだ。

しかもだ。法被の下の上着はだ。

紫だ。しかも只の紫ではなかった。

「おいおい、新助もやるな」

「江戸紫か？」

「それで来たか」

「助六かよ」

助六はその服が江戸紫なのだ。江戸歌舞伎第一の伊達男はその紫が定番だ。新助はその紫でだ。ここに出て来たのである。

しかも下は赤だ。その赤がまた目立つ。

その派手な色で出て来てだ。彼は。

高い、立てられた梯子に頂上まで登ってだ。それでだ。

鳶職も真っ青の動きを見せた。片手で逆立ちをしてだ。

そこから梯子の両端を動き回ってみせたりだ。空中に跳んで。

第六章

一回転して梯子の上に着地してみせる。一步間違えれば死ぬ芸もだ。

見せてだ。さらにだ。

梯子が複数出るとその梯子と梯子の間を行き来してみせる。これには江戸っ子達も驚いた。

「凄いな、こりやまた」

「下手こいたら死ぬのにな」

「それでもやるか？」

「身のこなしも凄いいけれどな」

「えらい肝だな」

その肝つ玉もだ。江戸っ子達を驚かせた。さらにだ。

彼は再び逆立ちしてまた梯子と梯子を行き来してみせてだ。最後は。

後ろに宙返りして梯子の一つを両手で掴んでだ。そこから。

一気に立ち上がり脚を閉じてすくつと立ちだ。腕を組んでみせる。そこまで見てだ。

誰もがだ。拍手喝采だった。

「おいおい、すげえじゃねえか！」

「最高だよ！」

「こんなのはじめて見たぜ！」

「凄過ぎるぜ！」

お捻りまで出る始末だった。彼の芸はまさに最高の見せ場になった。

それが終わってからだ。彼は。

美代吉のところに行きだ。こう問うたのだった。美代吉は今も手古舞の格好だ。

「どうだった？」

「いいね。服だけじゃなくてね」

「芸もだよな」

「凄かったよ。あんなの並だとできないね」

「あんなのできるのには他には児雷也だけだろうな」

歌舞伎の忍だ。それ位だというのだ。

「それか天竺徳平衡かな」

「そうだね。そこまでいつてるね」

美代吉も言う。そしてだ。

さらにだ。こうも言うのだった。

「肝っ玉に心根も見せてもらったよ」

「肝っ玉はわかるけれどな」

新助にしろそれも見せるつもりでした。だからだ。

こちらはわかった。しかしだ。

心根という言葉にはだ。眉を顰めさせて美代吉に問い返した。

「最後がわからねえな」

「ああ、それだね」

「俺はそれは見せたつもりはないんだけれどな」

「これが一番大事だけれどね」

「だよな。どんなに顔がよくて腕があってもな」

それでもだというのだ。彼も。

「心根が悪い奴なんてどうしようもないさ」

「そうだよな。人間まずは心根だよ」

「それがいいっていうんだな、俺は」

「それをもう見せてもらったしね」

今のだ。美代吉の言葉には。

新助は首を捻ってだ。こう問い返した。

「俺それ見せたか？」

「見せたじゃない」

「そうか？それ何時だ？」

「ほら、昨日ね」

その昨日だ。彼が何をしたかと話すのだった。

「火事で見せることは駄目だって言つたじゃないかい」

「ああ、あれな」

「下種はそこで見せるつて言つんだよ」

そうした人間はそうするといふのだ。世の中何時でも何処でもそうした人の不幸や危機に自分を見せようとする輩もいるのである。

だが新助はそれはしなかった。それを見てだ。

美代吉はだ。こつ言つたのだ。

「そこで見せてもらつたんだよ」

「あんなの当然だと思つがな」

「それを当然つて言えるところがいいんだよ」

「そうなのかい」

「そうだよ。あそこで殆んど決めたんだよ」

新助についてだ。そうしたといふのだ。

「あなたとね」

「だからまずは心根か」

「それが大事だからね」

こつだ。新助に話したのである。

そしてだ。美代吉は新助とだ。夫婦になるのだった。芸者は辞めてそうしてだ。彼と長屋で幸せに住むことにしたのである。心根を見せた彼と。

手古舞 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0848ba/>

手古舞

2012年1月1日23時49分発行